

# 常照

第800号

昭和二十九年の創刊以来  
真宗の小さな教化伝道紙  
〈常照〉はお陰さまで  
このたび第八〇〇号を  
迎えることができました

感謝合掌



## 〈常照〉紙名の由来と願い

毎朝お寺で勤まる『正信偈』の後半に、  
極重悪人唯称佛 我亦在彼摄取中  
煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我  
「罪の人々御名をよべ 我も光のうち  
にあり まどいの眼には見えねども  
佛は常に照らします」とあります。  
特に最後の「大悲無倦常照我」から、  
二文字を頂いて昭和二十九年一月、本  
紙〈常照〉の第一号が発行されました。  
「大悲倦（ものう）きことなく、常に  
我を照らしたもう」〓阿弥陀如来の大  
いなる慈悲の光明は飽（あ）くことなく  
常に私を照らしていただくさる、という

一節です。これは、源信僧都（942～1017浄土真宗七高僧の第六祖）によって著された『往生要集』の次の言葉が基になっています。「大悲無倦常照我身」この「大悲無倦常照我身」の「常照我身」について親鸞聖人は「無碍（むげ）の光明、信心の人を常に照らしたもう」|| 阿弥陀如来の何ものにもさまたげられることのない光明は、信心の人を常に照らしていただくのである、と説かれています。「常照我身」の「常」とは、いつでも、どこでも、という意味です。さらに言うならば、だれにでも、ということでしょう。ですから、「我身」とは、源信僧都だけではなく、私たち一人ひとりに関わる

言葉なのです。この中で注意したいのが、「我身」を「信心の人」と解説されていることです。親鸞聖人は、なぜ「信心の人」と一見、限定するような言い方をされるのでしょうか。そのことを考えた時、親になって初めて気づかされたことを思い出しました。

私が父親になって約十年。いつの間にか二人の子の親となりました。子どもたちにとって私がどのような存在なのか、また、父親としての役割をきちんと果たせているのかは正直わかりません。しかし、母親である妻が子どもたちと関わる姿をおして、親とは何なのかを教えられることは、しばしばあります。妻の生活は、朝起きてから

夜寝るまで、全てが子ども中心で動いています。食事のこと、洋服のこと、学校や友達のこと、また、休みの日の予定など……。私は妻の姿をおおして、初めて、いつも子どものことを考えて生活しているのが親であることを気づかされたのです。と同時に、私自身もそのようにして両親に育てられたのではないか、と考えるようになりました。では、両親の思いや願いに感謝しつつ生活してきたのでしょうか。これまでのことを振り返ってみると、「親の心子知らず」という言葉があるように、両親が考えていることや、かけられる言葉がただただ煩（わずら）わしく、自分勝手な行動ばかりして

歩んできたように思います。当時の私は、両親の思いや願いを本当の意味で感じ取ることはできませんでした。それでは、いつ感じ取ることができるようでしょうか。それは、自分勝手な行動をしても、いつも見守ってくれていることに気づいた時ではないでしょうか。気づけば、自然と感謝の気持ち湧いてくるでしょう。無碍の光明は、手を合わせる人も、そうでない人も、えらぶことなく常に照らしているに違いありません。しかし、手を合わさない人にとって、無碍の光明はどこにもありません。手を合わせて、南無阿弥陀佛とお念佛申す人にこそ、「常に照らしたもう」という実感があ

るのです。親鸞聖人が「我身」を「信心の人」とわざわざ解説されるのは、無碍の光明が、他でもない、お念佛申す私自身を常に照らしていただくさる。無常のこの世界にありながら阿弥陀如来の大きな慈悲の光が常に私を照らし護り導かれていいることを讃え伝えん、との先達の願いが本紙〈常照〉の紙名にもなったのです。どうか一緒にお念佛申していきましよう。

南無阿弥陀佛 合掌



九月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 九月七日(月)～十一日(金)

兵庫教区 朝来組 極樂寺

講師 軌保 真澄 師

○後期 九月十三日(日)～十六日(水)

滋賀教区 神崎組 稱名寺

講師 田中 諦康 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院くださいますよう、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号  
本願寺小樽別院

電話 二二一〇七四四番  
FAX 二九一四〇八〇番  
テレホン法話 二七一六一六番